

2000 年度講演会企画プレゼン第 4 弾

存在しない保坂和志、へ向かって「夏の終わりの林の中」を読む

11/11/20000 林真也

0・はじめに

本論の目的は、「小説家保坂和志をいないことにする」ということである。バルトが「作者の死」をとなえて久しいが、ここで問題となるのはその再認ではなく、わざわざ「死」を宣告する以前から保坂は存在していないのであり、存在したとしてもそれは小説内における一人称「ぼく」ないし「私」としてでしかありえない、ということだ。実際、講演者として呼んでいる以上、近い将来に矛盾が暴かれることになるだろうが、そんなことはこの際無視しよう。というより、そいつは別人だ。

1．あらすじ

特筆すべきことは起こらない。「ぼく」と「ひろ子」の二人の男女が、目黒の「自然教育園」を散歩する、だけ。

2．「夏の終わりの林の中」分析

当テキスト『夏の終わりの林の中』は、大きく二つに分けることができる。その姿勢は一貫しているものの、いわば枕詞としての前半とそれ以降には決定的な違いがある。それゆえ、まずは別々にみていこう。

前半部を読む

前半部を特徴づけるのは、二人の登場人物の郷愁（ノスタルジー）であろう。鎌倉で育った「ぼく」と「ひろ子」が、「自然教育園」の風景に、互いにノスタルジーを喚起されながら歩いていく。そして、「水鳥の沼」がそれを断ち切る。この区分は、初めて「自然教育園」に来た「ぼく」が、「ひろ子」がそこを時々訪れるのは、ノスタルジーを感じるためではないことに気づくくんだりと一致する。

ぼくは勘違いしていた。ひろ子はたまにここにやって来て、昔の鎌倉をノスタルジックに思い出したいのだと思っていたがそれは違った。ここに来るのはもっと別の目的か、あるいは目的なんかないかのどっちかで、最初のあの小径はひとつの楽しみとして鎌倉を懐かしいと思うことにしているだけなのだろう。(p.161)

留意すべきは「ノスタルジー」と「懐かしさ」である。前半部は、「ノスタルジー」と「懐かしさ」から始まり、そこへ次々と一般化の輪がかけられていきながら、「ノスタルジー」と「懐かしさ」へ収束していく。その過程で、世界を原因として人間の感傷を説明するという、原因と結果の一方単一的なメタフォリカルなベクトルが解体される。それは世界が立ち上がる過程である。

「ノスタルジー」と「懐かしさ」

まずは、「ノスタルジー」と「懐かしさ」を区分したい。

「ぼく」は、ノスタルジーに関して次のように感じている。

子どもの頃の風景、あるいは記憶にだけ残された風景というようなノスタルジックで情緒的なものは、
……思い出している風景が二人同じものだと思わなければきっと意味がない。(p.143)

逆説的に読めば、ノスタルジーとは「個人的な記憶を情緒的に思い出すこと」であるといえる。

「ノスタルジー」の、目的語としての個別的な「記憶」を思い出すという、

遂行的な働きに対し、感傷の一種として、いわば喚起されるものとしての「懐かしさ」である。

ひろ子とぼくは同じ年で、二人とも鎌倉で育った。だからひろ子は(園内の草を見て)「懐かしくならない?」と言い、ぼくは同じものを感じた。(p.140) [括弧内は林による]

「不安には実体がない」

「ひろ子」は秋に感傷的な気分になることの原因を、「秋に起こった出来事」に求めようとして事実誤認をする。そして「ぼく」が言った「不安には実体がない」という言葉を引き合いに出してから、

「だから秋口のものがなしさとか感傷っていうのは、一つ一つの事柄が問題じゃなかったの。」

季節っていうか、季節の記憶っていうかそれがこの年になると心の中にけっこう厚い層になって、その厚みだけで何かがあるような気がしてくる、(後略)」(p.157)

過去とは記憶としてしか表象しえない以上、その事実性においてはなはだ曖昧だといえる。それゆえ、その場その場の感傷的な気分は、眼前の出来事はおろか、記憶をさかのぼってそれを原因とすることもかなわない。感傷は、数え上げられる一つ一つの事柄が原因となるのではなく、(無限に)複数交差的に主体に内面化された「厚み」こそそれを生む。「ぼく」が引く「佐伯さん」の言葉を使えば、それは「習い性」のようなもので、条件反射的に「思いの型」ができる。そして、

感傷を感じるのは中身ではなくて、むしろ型の方の働きよるんじゃないかと(佐伯さんは)言った。(p.157)

[括弧内は林による]

むしろ、従来の関係でいう「結果」としての心の動きこそが、逆に「原因」を喚起していくのではないか。

先に区分した、「ノスタルジー」と「懐かしさ」はこのメカニズムで起こ

っていくはずだ。鎌倉で育った彼らは、「自然教育園」に「懐かしさ」を条件反射的に感じるようになってしまっている。ここでいう鎌倉とは「子どもの頃」という堆積した「時間」の「厚み」であり、二人がそこに感じた「懐かしさ」が、彼らの記憶を（捏造された過去として）ノスタルジックに喚起する。

「無機的な一定のリズム」

以上のように、人間の心の動きについて、実体としての何かにその起源を求めようとするメタフォリカルな因果性が解体された場所に残るのは、まだ名づけられていない、意味以前（＝言語以前）の世界であろう。

「……喜びとか怒りとか、そういう劇（ハゲ）しい動きがなくなっても、心というのはもっと無機的に、一定のリズムみたいなものを打って存在しているものなんじゃないかなあ　　。

それは劇しいうごきに頼っているかぎりたぶん気がつかないんだろうけど、そっちに関心が薄れると、無機的なものの静かなリズムが前に出てくる　　」（p.159）〔括弧内は林による。なお波線部分は原文では傍点〕

人間の心を中心に世界を理解すること、それは実際には心と世界の断絶を意味する。そうではなく、「無機的な一定のリズム」で世界へ向かい、できれば融解すること。それが『愛』（！）

世界と人間とをつなぐ象徴的關係が解体され、まさに世界が立ち上がる瞬間と、テキストの構造は無縁ではなく、一致している。丹生谷貴志が「裸の池」と呼ぶ「水鳥の沼」が、二人の郷愁を断ち切り、以降、「無機的な一定のリズム」が前景化する。

後半部を読む

「無機的な一定のリズム」が前景化するとはすなわち、「何もない」ということだ。先ほど解体されたような世界と人間との關係から得られるものは「何もない」。登場人物たちが感傷を覚えることすらない。

「ぼく」はここでも、「田舎の親戚の家」の周りの風景を思い出す。

もっとも今はもう違う。田んぼのまわりの道がほとんどコンクリートで固められてしまった。田んぼもだいぶなくなっていた。(……)「けっこうショックだったな」とぼくは言ったが、ひろ子は「知らない」と言った。(p.162)

後半を特徴づける発話は、「ひろ子」の「知らない」であろう。二人のノスタルジーは共有されることはなく、「ぼく」が言うようにそれは「意味がない」。「知らない」に関わらず、二人の会話は、何かは何かと象徴的に関係を結ぶことを、ひたすら回避していく。そして彼らの会話も「ぼく」の語りも「自然教育園」へと向けられる。

「自然教育園」

「林が本来の自然の法則にしたがって変化していく」この空間を、「ひろ子」は初め「人間の手がまるで全然入っていないかのように、手を入れている」と説明している。(p.147)しかし、閉鎖され、東京にあるにも関わらず東京ではない(p.167)、「不自然な自然の環境」(p.168)の「自然教育園」は、やはりその起源に人間を持たない。「『生きもののつながり』と言う説明看板」(p.169)が示す食物連鎖に、「人間の側の動物」であるカラスが入らない(p.170)ように、雑草と思しき植物にまですべて名前が付されている(p.166)にも関わらず、この空間の生態系には、名づけるべき人間が想定されていないのだ。ここに、人間以前、すなわち言語以前の「何もない」「無機的な一定のリズムを持った」世界が逆説的に開示される。

3. 存在しない保坂和志、へ

丹生谷貴志は同じく「夏の終わりの林の中」について次のように述べている。

.....そこには「深淵」の誘惑へとあやうく雪崩て行く場所において「小説」を観念に対する戦いとして維持しようとする作家の意思が感じられる。

全体的にも、部分的にも、「小説」を一種の比喩形象としての「深淵」へ導かないこと。言語論的に言えば、永遠にシニフィエへと行き着かない、シニフィアンシニフィアンの戯れとしての「小説」(=テキスト)。

バルトが「作者の死」と言ったときの目的は、作者と作品の位階的、因果的關係を解体することによって、無記名の「テキスト」を立ち上げることであった。「夏の終わりの林の中」は半ば自意識的に、作品として「小説」を提出しながら、「小説」を解体してしまっているとは言えないだろうか。もっと言えば、そこは言語そのものが解体されていく地点である。このとき、言語活動者としての保坂はいない方が都合がいい。そして、バルトにおけるテキストと相同的に世界が立ち上がる時、保坂は無媒介的な媒介となるか、あるいは、「ぼく」としてしか存在しえない(なぜなら「ぼく」を通じてわれわれは世界を体験しているのだから。それは決して講演会にやって来る保坂和志ではない)。

4. まとめ、補完として

人間が世界に対峙するときにあふれ返る観念と深淵を、鋭い感受性の名のもとに忠実に表象しようとしたのが、近代文学のリアリズムであるとするならば(同時にわれわれもそれをリアルと感じてきた)、保坂はそれとまったく逆の事をしようとしている。観念の深みに抵抗することで、観念以前、言語以前の世界を表象する、このラディカリズムこそが保坂を特徴づける。程度に還元されない絶対的な位相としての不在。その意味で保坂の小説は逆説的に(つまりリアリズム文学に対して)虚構であり、「自然教育園」とは構造的に相同であるともいえる。

おそらく保坂には、小説か、哲学か、エッセイか、というような葛藤はもはやないだろう。「別種のディスクールを準備する」ことが小説であり、つねに準備し続けていくなれば、ただ小説があるのみではないだろうか。

0 ポッキーの日。その最も意義深い日は、まさに一年前の今日であった。詳しくは、平田氏による昨年の講演会対策プレゼン『「『ショアー』の衝撃」を読む』レジュメを参照。氏の洞察は鋭く、この日が同時に「プリッツの日」であることも指摘している。

1 ロラン・バルト「作者の死」『物語の構造分析』花輪光訳 みすず書房[1979]

2 保坂和志「夏の終わりの林の中」『この人の闘』新潮文庫[1998] 以降、本文にページ数のみ表記の場合、すべてここからの引用とする。

3 保坂、前掲書、p.156 <「(……) だいたい前のダンナとあったのは秋じゃなかったもんね。(……)」>

4 保坂、前掲書、p.144 <ぼく自身が感じたことというなら、ここで感じた懐かしさは故郷に対するものではなくて、子どもの頃という時間に対するものだった。>

5 保坂和志「『愛』」『アウトブリード』[1998]朝日出版社

6 丹生谷貴志「「深淵」の誘惑への戦い」『死者の挨拶で夜が始まる』河出書房新社[1999]p.172

7 保坂「夏の終わりの林の中」『この人の闘』p.168 のタルコフスキーについて、p.178 の夢についてなどを参照。

8 丹生谷、前掲書、p.172

9 しかし、「自然教育園」を囲ったのはなにものであろう。

10 保坂「やっぱり猫のこと、そして犬のこと」『アウトブリード』p. 16